



月刊「HANAYASURI」2024年3月号（通巻22号）

P2-3 巻頭エッセイ「和らぎだす頃」相地透

P9 「水をめぐる話し 第十一回」土山ふみ

P11 観察会②「アカガエルのたまごをさがす」相地透

P14-15「チェイン・オブ・ライフ」相地満

P18 日常エッセイ「おいしいみやげ話 14」長谷川芙実子

P4-8 「知多半島の四季をめぐる（春の花 篇）」相地透

P10 観察会①「第十七回西味鏡観察会」大西直美

P12-13「子どもが不思議と出会う時（二十二）」森下京子

P16 リレー連載「鳥を探して①」相地優子

P17 詩「春は確かに」相地満

P18-19 観察会のお知らせ [3～4月]

表紙／「ミモザ」青山映子 Eiko AOYAMA

## 巻頭エッセイ「和らぎだす頃」

2月20日。昨日、久しぶりに丸一日降っていた雨がやみ、朝から春のように暖かい。二十四節気で言うと、昨日は「雨水」。雨が降り、寒さが和らぎだす頃とされる時季である。パソコンに向かい、朝から調べものをする。今は、詩人で編集者でもあった異聖歌（本名：野村七蔵／1905～73）について考えている。

昨年12月、異聖歌が暮らした東京・日野市で開催された「特別展 童謡詩人異聖歌と児童文学に生きた、ひとすじの道」を観に行った。地元ゆかりの新選組を紹介する歴史館の一階と二階を使い、詳しく異聖歌の業績を知れる展示だったが、観覧者はわずかだった。

異聖歌は、童謡「たきび」の作者であり、新美南吉の作品を世に紹介した人物としても知られている。南吉は8つ年上の聖歌を兄のように慕っていたそうだ。一昨年来、南吉の詩と関わるにつれて、詩から想像される南吉像に寄り添うように、異聖歌の存在が浮き上がり、くつきりと輪郭を描き始めていた。

南吉は東京外国語学校に通うため、異聖歌を頼る。聖歌は南吉が学校に通いやすいように家を借り、一緒に暮らした。聖歌の結婚が決まると、南吉と一緒に住んでいた家を出るが、住まいが移った後も頻繁に出入りし、聖歌は妻である画家の野村千春とともに、南吉と家族のような付き合いを続けた。咯血した南吉を東京で看病したのも夫妻だった。

帰郷して数年後の1943年2月、病気が悪化した南吉は、作品を聖歌に託すため手紙を書く。慌てて半田に駆け付けた聖歌は、看病しながら、後の作品の扱いについて南吉の希望を聞く。3月22日、春が深まってきたころ、南吉は亡くなる。戦後になり、すでに勤めていた出版社・アルスから独立していた聖歌は、一人の編集者として南吉の作品を世に出すため奔走する。南吉文学を広めることは、聖歌にとって生涯にわたる仕事となった。

パソコンの電源を落として、数冊の本を借りるため、鶴舞公園にある中央図書館に行くことにした。図書館の駐車場に入ろうとしたが満車だったので、最近、整備された公園の外周を走り、北側の新しい駐車場に向かう。周辺の細い道路はなんだか混み合っている。すぐそ

ばを「にけつ」したバイクが騒々しく追い抜いていく。新しい駐車場もいっぱいだったので公会堂前の駐車場に入れると、理由が分かった。私立高校の卒業式だった。ブレザー姿の学生があちらこちらで談笑したり、写真を撮ったりしている。周りにはスーツ姿の先生と保護者の大人たち。制服を着ないといけないわけではないのか、それとも他校の学生なのか、私服姿の若者もたくさん集まっていた。

春、真っ盛りかのような気温。一緒に学生生活を送ってきた仲間と広い会場に集まって、楽しいのだろう。それぞれに晴れやかな表情をしている。その姿を見て、「そろそろ冬も終わりなのだな」と実感する。青い空の下、公園の中を歩いて図書館に向かうと、にぎやかな人混みのそばをアオスジアゲハが飛んでいった。

本を借りて家に帰ると、玄関前のカリンの木で「ツイーッ！」と鳥の声がした。ずいぶん近くで鳴くので見ると、シジュウカラのつがいだった。今年は鳥をしっかりと観察しようと思っていて、だんだん、すぐに見つけられるようになってきた。先月から今月にかけて、熱田では、ツグミ、カワセミ、数種のカモ、メジロ、ハクセキレイ、年中いるヒヨドリ、カラス、ドバトなどの鳥と出会っている。鳥たちが必死に食べるものを探している今は、もつとも鳥を近くに見られる季節かもしれない。

再びパソコンの前に座り、借りてきた一冊、「新版 せみを鳴かせて」（異聖歌作、こさかしげる絵／大日本図書、1990）のページをめくる。異聖歌が生前出版した詩集の中から選んだ詩が収録されている。詩人の観ていた四季の風景が、穏やかな言葉のつらなりで描かれる。自然の風景を描いていても、そこには、自然を見つめる人が存在している事が感じられた。きっと、大らかで人を包み込むような魅力があり、南吉もそんな聖歌を信頼していたのだろう。自然を見つめ文学を愛した二人に、想いを馳せる一日だった。

槇の葉っぱのかげにいる、／小鳥はなんの鳥でしょう。／うすいみどりのはねのいろ、／ももいろしてるほそい脚。／巣でもかけるか、つくるのか、／きのうもきていた槇のかげ。／小鳥がきている樹の向こう、／ちいさい虹がたちました。（「虹」）

（相地透）

## 知多半島の四季をめぐる（春の花篇）

### 相地透

2月上旬。体感では一年でもっとも寒い日が続く頃、二十四節気では立春となる。昔の人々は、春をおおむね15日間隔で捉えていた。「立春↓雨水↓啓蟄↓春分」。春分に迎えた春の盛りは、次の季節へと向かう。「春分↓清明↓穀雨↓立夏」。立夏は5月上旬となり、夏の始まりとなる。

2月のフィールドはまだまだ冬の気配が漂う。歩いていても目に留まる彩りは冬の名残りの木の実と、年中、暖かい日に咲いている、ホトケノザやオオイヌノフグリくらい。それでも、白い稲わらから覗く草花の色味は、一本の燐寸のように心に光を灯す。かじかんだ心が、少しだけ温まる。

冬のタンポポについて最初に書いておくと、冬場に咲いているのはセイヨウタンポポが多い。ロゼットの中心で茎を伸ばさずに咲いているのは、大体、セイヨウタンポポである。もちろん、例外はあり、雑種タンポポというものもあるので断定はできないが、総苞片の外片を見ると、髭のように反り返っているものが多い。シロバナタンポポも冬に咲いている。南知多町を中心に、一見、シロバナタンポポのようだが、黄色が淡く、クリム色に近いタンポポがある。このキビシロタンポポは、中国地方とこの地方に生育する種と考えら



左上：シロバナタンポポ。右上：セイヨウタンポポ。右下：キビシロタンポポ。比べてみると色の違いが分かりやすい。（すべて2024年2月撮影）



れている。近くに咲いているセイヨウタンポポと比べると、明確に色の違いが分かる。総苞片の外片は反り返らない。

木の花では、1月に満開だったヤブツバキの花が終わり始める頃。蕊も花弁も、そのままぼとつと落ちていく。木全体で咲いているような山茶花も冬の彩。それらと入れ替わるように、民家の軒先や田畑の傍に植えられている梅や蟬梅が咲き始め、徐々に満開へと向かっていく。ため池などの水辺では、日常生活の材としても使われたハンノキの雄花と雌花がいち早く咲く。葉が出る前に咲く花である。

この頃に孵化し、オタマジャクシとなって、ちょろちょろと泳ぎ始める。それに合わせて、ハシリグモなどの捕食者も動き始める。

中旬頃の気温が上がった晴れの日、野の花にとつての春が一気に到来する。ロゼットから茎が立ち上がり、または芽生えてから葉が広がり蕾をつけるまでは「徐々に、徐々に」という感じで大きくなるが、この日を待っていたと言わんばかりに一気に開花する。カラスノエンドウ、シロツメクサ、ノミノフスマ、ハナイバナ、ヒメオドリコソウ。年中見かけるオオイヌノフグリやホトケノザも、あちらこちらで鮮やかに咲いていて、この時期が本来の花期だと実感する。草むらではナナホシテントウが行き来し、キチヨウなど越冬した虫も動き出す。

この時期に観察しているスマイレについて少し書



左：マキノスマイレ。美浜町のある観察地では1月でも葉のない状態で花だけ咲いている。右：ヒメスマイレ。石垣やアスファルトの隙間で見かける。ほかの種よりも明らかに花が小さい。

いておくと、この数年間、フィールドを歩いていると、たくさんのスマイレと出会った。街中でも見かける、その名の通りのスマイレ。葉も花もスマイレより小さいヒメスマイレ。雑木林の林床に咲く白いフモトスマイレ。赤紫色が美しいシハイスマイレ、マキノスマイレ。地上茎のあるタチツボスマイレの仲間。10種前後は見ていると思うのだが、種の判別が難しいため、何種あるのかは分からない。同じ時期に、春の花の代名詞、桜が咲いている。暖かくなってきて、顔を上げ、青空を背景に桜を見たくなくなるけれど、足元に咲くスマイレの花もかわいらしく、春風に揺れている。

田んぼには、レンゲ、スズメノテツボウ、キツネノボタンなどが多く見られるようになる。紫色の華やかなオオアラセイトウ（シヨカツサイ、ムラサキバナとも呼ばれる）もこの時期。道路端にはマンテマやマツバウンランなどが咲く。トウダイグサは少し変わった形をしていて、葉苞に包まれた複数の黄色い花の姿が、燈火に見えることから、名前が付けられたそうだ。4〜6月頃が花期とされるが、気づくと花の時期が終わっている。短期間で花が見られなくなる印象である。

雑木林でも、スマイレ以外の草花を見かけるようになる。林内でも林縁でもよく見かけるムラサキケマン。ウラシマソウは、サトイモ科の植物で、この科特有の仏炎苞と呼ばれる苞に包まれた花を葉の付け根に咲かせる。シュンランは、ラン科の植物。ランの仲間のなかで最初に咲く花。ランの

毎年、観察会をしているアカガエルのたまごを探しに行くのは、大体2月中旬頃。立春から一週間ほど経った雨後である。知多半島の田んぼは、水を抜き、乾田で冬を越しているところが多い。稲のひこばえが残っているとところもある。雨が降ると、ごてごてした土塊のあいだに水が溜まる。冬眠中のアカガエルは雨を察知して、一旦、冬眠から目覚め、夜の雨中に交接し、田の水溜まりにたくさんの卵塊を残す。そしてもう一度冬眠し、3月初めに再び目覚める。暖かな日に、ケロケロ

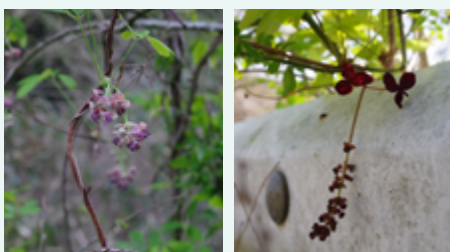
と野に春の音を響かせる。

さて、アカガエルのたまごを探している頃に出会う草花には、次のようなものがある。コオニタビラコ、コハコベ、タネツケバナ。最初の2つは春の七草の「ほとけのぎ」と「はこべ」。七草がゆに入れる「ほとけのぎ」は、年中見かける赤紫色のホトケノザとは違い、間違つて食べると下痢をするそうだ。ハコベの仲間さまはさまざまあるが、この時期よく花を目にするのはコハコベが多い印象。とても小さな白い花だが、よく目を凝らして見ると、まれに雄しべが赤い花がある。草むらにしゃがみこみ、探してみるのも楽しそうだ。

ほかには、ヒメウズ、キュウリグサ、オランダミミナグサ、オオジシバリなども、この頃から花が咲いている。

3月上旬、啓蟄を過ぎると、気になり始めるのは生きものの動き。アカガエルは順調にいけば、仲間は、コクラン、ネジバナ以外は見つけることが困難である。ほほ、無い。シュンランもかつては人の生活に身近な雑木林にはたくさん咲いていた、地域によっては、食草としても使われていたという話を聞くが、近年見られる場所は大幅に減っている。毎年、かつて生育していた場所を訪ねて回るのだが、林床がテイカカズラやノハカタカラクサなどに覆われてしまった場所も多い。確実に咲いていると把握している場所は、ほんの数か所である。

さて、木の花では、ヤマモモの花がこの頃、咲いている。初夏、寺社のそばなどで実がころころ転がっていると、なっているものをつまみたくなるが、花は目立たずこの時期に咲いている。甘い実のなるアケビの花が咲くのもこの頃。知多半島では、葉の枚数が異なるゴヨウアケビとミツバア



左上：ゴヨウアケビ。右上：ミツバアケビ。ミツバアケビの方が、色が暗く紫色が深い。左下：ヤマモモの花。



○ 2月に撮影した花

<木本>

ウメ	バラ科
オガタマノキ	モクレン科
コウヤボウキ	キク科
ソシンロウバイ	ロウバイ科
ハンノキ	カバノキ科
ヤツデ	ウコギ科

<草本>

オオイヌノフグリ	ゴマノハグサ科
オオジシバリ	キク科
オニノゲシ	キク科
オランダミミナグサ	ナデシコ科
キツネノボタン	キンポウゲ科
キュウリグサ	ムラサキ科
コオニタビラコ	キク科
コハコベ	ナデシコ科

シハイスミレ
シロバナタンポポ
スイセン
セイヨウアブラナ
タガラシ
タネツケバナ
ツタバウンラン
ニホンタンポポ
ノミノフスマ
ハマダイコン
ハルジオン
ヒメウス
ヒメオドリコソウ
フモトスミレ
フラサバソウ
ホトケノザ

スミレ科
キク科
ヒガンバナ科
アブラナ科
キンポウゲ科
アブラナ科
ゴマノハグサ科
キク科
ナデシコ科
アブラナ科
キク科
キンポウゲ科
シソ科
スミレ科
ゴマノハグサ科
シソ科

○ 3月に撮影した花

<木本>

アオキ	アオキ科
ウメ	バラ科
オオバヤシャブシ	カバノキ科
オガタマノキ	モクレン科
コウヤボウキ	キク科
コナラ	ブナ科
コブシ	モクレン科
ゴヨウアケビ	アケビ科
サクラ	バラ科
ネズ	ヒノキ科
ハクモクレン	モクレン科
ハンノキ	カバノキ科
ヒサカキ	モッコク科
ヒノキ	ヒノキ科
マメナシ	バラ科
ヤブツバキ	ツバキ科
ヤマザクラ	バラ科
ヤマモモ	ヤマモモ科

スズメノヤリ	スミレ科
スミレ	スミレ科
セイヨウタンポポ	キク科
タチイヌノフグリ	ゴマノハグサ科
タチツボスミレ	スミレ科
タチツボスミレの仲間	スミレ科
タネツケバナ	アブラナ科
トウダイグサ	トウダイグサ科
トキワハゼ	ゴマノハグサ科
ニホンタンポポ	キク科
ノボロギク	キク科
ノミノフスマ	ナデシコ科
バイモ	ユリ科
ハナイバナ	ムラサキ科
ハナニラ	ヒガンバナ科
ハハコグサ	キク科
ハマエンドウ	マメ科
ハマダイコン	アブラナ科
ヒメウス	キンポウゲ科
ヒメオドリコソウ	シソ科
ヒメスミレ	スミレ科
フキ	キク科
フモトスミレ	スミレ科
フラサバソウ	ゴマノハグサ科
ベチコートスイセン	ヒガンバナ科
ヘビイチゴ	バラ科
ホトケノザ	シソ科
マキノスミレ	スミレ科
マツバウンラン	ゴマノハグサ科
マンテマ	ナデシコ科
ミチタネツケバナ	アブラナ科
ムスカリ	キジカクシ科
ムラサキカタバミ	カタバミ科
ムラサキケマン	ケシ科
ヤグルマギク	キク科
ヤブタビラコ	キク科
ユキヤナギ	バラ科
ラッパスイセン	ヒガンバナ科
レンゲ	マメ科

<草本>

アフリカヒメアヤメ	アヤメ科
ウラシマソウ	サトイモ科
オオアラセイトウ	アブラナ科
オオイヌノフグリ	ゴマノハグサ科
オオジシバリ	キク科
オランダミミナグサ	ナデシコ科
カキドオシ	シソ科
カミツレ	キク科
カラスノエンドウ	マメ科
キュウリグサ	ムラサキ科
コハコベ	ナデシコ科
シハイスミレ	スミレ科
シュンラン	ラン科
ショウジョウバカマ	ユリ科
シラユキゲシ	ケシ科
シロツメクサ	マメ科
シロバナタンポポ	キク科
スズメノエンドウ	マメ科
スズメノテッポウ	イネ科



稲荷神社のマメナシの花。下から見上げた様子。

ケビの両方を見ることが出来る。つるから、ひよいと花柄を伸ばして、ミツバアケビは深く暗い紫色の花、ゴヨウアケビは明るい紫色の花を咲かせている。

モクレンの仲間では、3月上旬にいち早くオガタマノキが咲く。良い香りがして、白と紅紫色の花びらが散っているのを目にする。下旬から4月にかけて、コブシ、ハクモクレンの花が咲く。

4月。各地が春祭りでにぎわう頃、咲いている花の数がピークに達し始める。2021年から2023年の春(2~4月)に出会った花で、写真に撮ったものをまとめてみたところ(7~8ページにリスト掲載)、2月が30種、3月が76種、4月が105種だった。花に限って撮るのではないのだが、どこでも花がよく目立つので、カメラを向けることも自然と多くなる。のどかな春祭りに花を添えているのは、春の花々の風景である。

知多市金沢にある稲荷神社には、マメナシの花が保存されている。花の時期は3月下旬から4月

上旬。高い木なので気づきにくいですが、見上げるとヤマザクラに似た白い花が満開となっている。

身近な草花では、オオバコの仲間、ハハコグサの仲間、カタバミの仲間(オオキバナカタバミやイモカタバミなど、冬に見かける花もある)、ニワゼキショウ、カキドオシ、コメツブツメクサとコメツブウマゴヤシ、トキワハゼ、ハルジオン、ナガミヒナゲシ、アメリカカフウロ、キランソウ、黄色いキク科の花々などが目立ってくる。かつては花壇などで咲いていて逸出したとみられる、ムスカリ、イングリッシュ・ブルーベル、フリージア、ハナショウブなども見かける。

雑木林では、クロバイやコナラ、モチノキなどの花が満開。ヤマモモの花と同じように、すぐには気づかないが、匂いや林床に散った花で咲いていると気づく。木々に巻き付き幹を成長させたフ

左：シダの上にクロバイの花。良い匂いがする。

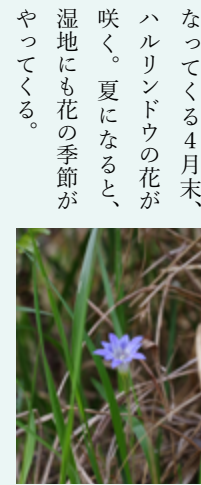
右：林床に散ったモチノキの花。クロバイよりもやや黄色味がある。目立たないが、街中の神社などでも散っているのをよく見かける。

最後に、ある湿地の花について添えておく。3月の終わり頃から湿地ではショウジョウバカマの花が咲く。ここには微妙に色の異なる赤い花と黄色い花がある。春に芽生えたモウセンゴケが大きくなってくる4月末、ハルリンドウの花が咲く。夏になると、湿地にも花の季節がやって来る。

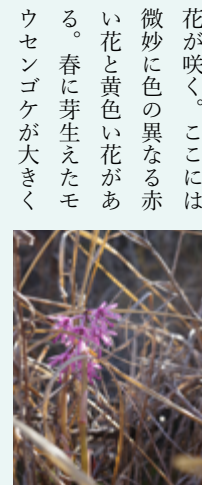
4月の終わりは、春の終わりとともに、夏に向かって季節が移り始める時期。海岸では春から咲いているハマダイコン、ハマエンドウに加えて、海浜植物がそれぞれ芽生え、砂浜に爽やかな緑を敷き始める。

雑木林の林床には、ナルコユリが鳴子(田畑で使う鳥よけの農具)に似た花を垂らす。細長い花の先端は、わずかに開く。限られた場所でしか見られない、つる植物のホタルカズラは、しばらくするとやってくるホタルの舞う時期を前に、青い花を咲かせる。

4月の終わりは、春の終わりとともに、夏に向



ハルリンドウ



ショウジョウバカマ

ジの花が咲くのも4月。白花の房が垂れ下がるシロバナヤマフジも同じ時期。フジと同じマメ科で街路樹に用いられ、あちらこちらで増えたハリエンジュ(ニセアカシア)は、4月の終わり頃、公園や道路の脇で白い花を咲かせている。

雑木林の林床には、ナルコユリが鳴子(田畑で使う鳥よけの農具)に似た花を垂らす。細長い花の先端は、わずかに開く。限られた場所でしか見られない、つる植物のホタルカズラは、しばらくするとやってくるホタルの舞う時期を前に、青い花を咲かせる。

4月の終わりは、春の終わりとともに、夏に向